



ドクター板東の メデイカルリサーチ Vol.121

～いま歴史 伝えて語り 継ぐ使命～

<http://pianomed-mr.jp/>

今年もあと1カ月あまり。

2015年は戦後70年にあたり、日本人にとって非常に重要な1年であった。夏には各報道機関でいろいろな企画が行われることに。戦争を後の世代に伝え、語り継ぐという意味で、今後はこれ以上の適切な機会を得るのは難しいだろう。

先日104歳になられた聖路加国際大学名誉理事長の日野原重明先生は、中年の世代に対して、今年の意義を述べられている。我々誰もが使命を担って生きているのだが、少しでも何かお役にたつことができていくだろうか？

今回は、日野原先生が主宰されている「新老人の会」が鹿児島県の知覧で講演会を開催されたので、その報告をさせて頂きたい。

104個の句集

日野原先生は、21世紀を生きた高齢者の意義深い人生を実践していく全国組織「新老人の会」を設立された。そして、今も全国の支部を訪問され、講演会を



図1

続けられている(図1)。

先生がいつも述べられているのは「年をとっても、新しいことを創めよう」という前向きな姿勢だ。単に「始める」よりも創造的な内容で「創める」ことが大切という。

今年の誕生日にはお洒落な句集「10月4日、104歳に104句」を出版(図2)。御講演のため鹿児島県の知覧へ出発された。



図3

大切な知覧

日本人にとって知覧は極めて重要な意味を持つ。特攻隊の基地があった場所として知られる。



図2



図4

今回は「新老人の会」鹿児島支部の鹿島友義氏と濱矢欣洋氏の御世話により、素晴らしい講演会となった。日野原先生も歴史的意義について触れられた。

この会場に隣接して、「知覧特攻平和会館」が建てられている(図3)。

入口の手前の石碑には(図4)、特攻隊の若者たちが慕った鳥濱トメさんの記述がみられた。

いちどは知覧を訪れなければと思い、前もっていろいろと調べていた。しかし、会館で当時の資料や手紙など目の当たりにすると、あまりにも若い人たちの肉筆の言葉に衝撃を受け文面が読めないほどであった。

小生に今できる事は、この歴史事実を回りの人達に



図6

当時、特攻隊の若者たちの心の支えとなったのが、富屋食堂女主人・鳥濱トメさんだった。このたび、ト

人々を救う菩薩

特攻隊員が出撃前、人生の最期の時「月光の曲」をピアノで演奏し、本や映画で紹介された「月光の夏」でも知られる(図6)。

伝え少しでも多くの人に知ってもらおうことだろう。

なお、数多くの関連書籍の中で概要を把握できる書籍を紹介したい(図5)。



図5

メ氏のお孫さんから、当時の模様をお聴きさせて頂く機会を得た(図7)

その中で彼らの最後の晩餐となった「馳走がある(図8)」。先立つ先輩に敬意をはらうかのように、母心を込めたおにぎりは、なかなか喉を通らなかったに違いない(図9)。



図7



図8

地球をつつむ歌声

講演の翌日、日野原先生は東京でNHK全国学校音楽コンクール(Nコン)決勝大会に生出演された。というの、小学校の部の課題曲「地球をつつむ歌声」の歌詞を担当されていたからだ。

これまでに、全国各地の小学校を訪問し、「いの



図9

ちの授業」を行ってこられた。命の大切さ、平和の尊さを次世代の子どもたちに伝えるためである。

歌詞を図10に示す。喋ったり歌ったりしていると、歌詞が言葉となり、心の基盤を形成する。音楽は人の潜在意識レベルに簡単に入り込める。この音・楽の力で、友情や平和を愛する心を育んでいくことだろう(図11)。

地球をつつむ歌声

みんなが集まって
生きるには
かならず歌が生まれ
歌は人とともに育ちました。

二人集まれば デュエット
三人集まれば トリオ
四人集まれば カルテット
地球をつつむ歌声は
なんと力強いものでしょう。

みんなが集まって
生きるには
かならず歌が生まれ
歌は人とともに育ちました。

こどもたちと家族が一緒に
両手をふって
平和の歌を歌いましょう。

図10

おわりに

今回、平和をスローガンに含む「新老人の会」の講演会が知覧で行われた。当地でかつて若者を支えた鳥濱トメさんや「月光の夏」の物語を我々は後輩に伝えていきたい。その際、言葉に音楽を伴うと歌の詩が人の心に強く刻まれ、平和への想いがさらに広がっていくだろう。

(板東浩、ばんどうひろし、医学博士、糖尿病専門医、ピアノリスト)



図11